

理念

経営

2009年2月1日発行

2月号

定価1050円

CORPORATE
PHILOSOPHY

企業の成功法則

社長力・管理力・現場力
三位一体論

企業事例研究

繰り返し材料を微調整
すると本質の味が囁いてくる

オタフクソース株式会社

顧客に真剣に応えれば、“受注の連鎖”が
生まれる

株式会社アイム・コラボレーション

2

2009
February



[巻頭対談]夢は必ず叶う 勇気と挑戦の経営

実の商人は、先も
立ち、我也立つこと
を思うなり

歴史学者

上田正昭 vs 鷺田小彌太

札幌大学教授

特別講演

「ありがとう」を口にして
いると、限りなく、自分が
優しくなっていく

国文学学者 中西 進



miken



左:男性は女性スタッフの頼れる柱／中:社員の結婚式で輝く女性たち
と。中央は息子の幹君／右:毎年恒例ゼムケン・ファミリーキャンプ

お母さんが輝いていると、お父さんも頑張り、子どもの未来が明るくなる



「社名は“建築は善を生むサービス業”から」と籠田さん

有限会社ゼムケンサービス 代表取締役

籠田 淳子

text by Junko Komorita

典型的な男性社会の建築業で、右手に電話。
ペン・マウス、左手に赤ちゃんを抱え。
ユニークな経営方針を開拓してきた社長の夢は
「女性の力をまとめて、建設業支援事業をしたい」と
広がっていく。

「棟上げ」に女性が上 がれない男社会で

幼い頃、夜中に目が覚め「お母さんに会いたい」とどれほど泣きじゃぐつたことでしょうか。私が生まれた年に父は建設会社を創立し、働き始め。母は会社で父を助け、夕方は職人さんに食事を食べさせ、夜は飲食店を経営して働く日々でした。そんな両親を見て育った私が選んだのは、やはり『建築』の仕事でした。しかし、父は「女はこの世界で活躍できない」と猛反対。建設業はいまだに「棟上げ」に女性が上がれない男社会です。娘の将来を思えばこその

一言だったのでしょう。
頑固さは親ゆずり、反対されてもあきらめませんでした。

幼い頃から、「人が十分頑張るなら、あなたは十二分に頑張りなさい」と育てられた私は建築学科を卒業しました。最初のプレハブメーカーでは自分の力にもどかしさを感じながら、とにかく働いて学ぶことが大事と決めたのです。

そして、一年間で貯めた一〇〇万円を握りしめ、「身銭学習」を決意。バッグひとつでヨーロッパを周遊し、街並みや文化から多くのことを学びその後の自由設計に繋げました。

帰国後は店舗デザインの会社に就

職し、何事にも全力で取り組み、次第に大きな仕事を任されていきました。

大きな現場で壁にぶち当たることもありましたが、建設業では女性のデメリットよりもメリットの方が大きいと感じていました。

二十六歳で一級建築士の資格を得たとき、父は驚き、心の底から喜んでくれました。次々と店舗や住宅を手がけていた二十七歳のとき、父から戻ってきてほしいと懇願されました。

父の会社は小さな建設会社でしたので設計・積算・職人の手配・現場監督・営業・集金などでも仕事を次々と覚えていました。

私が「女性経営者」の 自覚が芽生えたとき



左:壁も塗るし団面も書くじ“お母さん”は手作り大好き／右:“ママの笑顔”は家族の元気の源

やがて仕事を応援してくれる伴侶に出会い、結婚。すべてが順調だったある日、突然、父が亡くなつたのです。共に仕事をして以来、どんな仕事にも最大の評価をくれた父の死は、耐え難いものでした。夜泣きながら寂しさと一緒に乗り越え育つた兄と私は、会社を一つずつ引き継ぎ、新たなスタートをきりました。

我が社の最初の社員は女性でした。彼女は教師の免許をもち一度職についたものの、建築の仕事がしたいという夢を果たすため、再度大学に入学した頑張り屋でした。

私が社員は女性でした。彼女は教師の免許をもち一度職についたものの、建築の仕事がしたいという夢を果たすため、再度大学に入学した頑張り屋でした。

私も同じ嫁であり母親です。彼女のことはよく理解できます。私は、周囲に理解がありましたが、私のように好きな建築の仕事をとことんやっていく環境の女性は数少ないのではないか。

ごめんなさい。私ならあなたの夢を実現するための職場をつくることができたはずなのに――。そこに気づいたときにはじめて、私の女性経営者としての自覚が芽生えたのです。

その後、子育て真っ盛りの一人の女性を採用し、建築専門分野では、どこも手がけていないワークシエアリング（一つの仕事を多人数で分け合う）を実行しました。

家庭では、女性が価格決定、価値決定をすることが多くなっています。建築は家を造り、街を創ります。家庭だけでなく社会でも、決定する場により多くの女性が参加すること。

現場では、職人さんの腕を磨けるいい材料を使い、現場を綺麗に保つことも徹底しました。また、女性ならではの感性を生かし、光については必ず一つの現場でオリジナルで設計しま

した。ミルクアレルギーのため、母乳でないと育てられず、常に右手に電話・ペン・マウス、左手に赤ちゃんという生活でした。私自身は一日三時間の睡眠時間しかとれず、赤ちゃんが三時間寝てくれたときが一番仕事がはかどるときでした。

現場では、職人さんの腕を磨けるいい材料を使い、現場を綺麗に保つことも徹底しました。また、女性ならではの感性を生かし、光については必ず

一つの現場でオリジナルで設計しま